

大学図書館の50年

～連携を中心として～



2021年5月20日
大学図書館支援機構
小西 和信

0 はじめに

- ☆ いま、IAALとして何かできることはないだろうか⇒講演会
・活動の節目? 設立15周年は来年度!
- ☆ 「大学図書館50年」とした意味 1970～2020
・個人史との関わり 1972年大学図書館入職～2019年大学図書館長退任
・たまたま図書館の成長期、発展期、激動期にあっていた
- ☆ 叙述の方法と目標
・時系列ではなく、図書館連携のトピック・テーマに対する記憶、体験をたどる
(回想、回顧、昔話)。鶴見俊輔氏の『読んだ本はどこへ行ったのか』
【引用①】。
・この50年の大学図書館の歴史から何を学び、次代に伝えるべきことは何か
・背景のカードケース 【引用②】の写真について。

1 50年略史 (おさらい)

大学図書館50年 (1970～2020) 略史

- 1 「大学図書館の近代化」後の発展期 (1970-1974) →学生へのサービス
- 2 文部省大学図書館課の政策時代 (1975-1979) →学生用図書費、外雑センター
- 3 学術情報システム構想 (1980-1984) →学術審議会の答申
- 4 NACSIS-CATの運用/大学図書館機械化 (1985-1989) →混乱から定着へ
- 5 大学設置基準の大綱化/NACSIS-ILL (1990-1994) →存立根拠の喪失
.....
- 6 電子図書館とOPAC (1995-1999) →デジタル化の進行と蔵書情報の公開、普及
- 7 学術雑誌の危機と電子ジャーナルへの対応 (2000-2004) →EJ時代の幕開け
- 8 機関リポジトリへの取り組み (2005-2009) →研究成果の蓄積と発信
- 9 ラーニング・コモンズ (2010-2015) →学生の居場所の確保
- 10 外部委託の進行/デジタル・アーカイブ&オープン・アクセス (2015-2020)

(埼玉県大学・短期大学図書館協議会SALA 講演会 2019年12月
「大学図書館50年を振り返る」での示したもので、一部改変 参考文献: 小西2020)

2 70年代の図書館と私

▽学生時代 (1968～1972)

- ・教養部の図書館 (2万冊) →筑摩世界文学全集のイメージ 【引用③】。この蔵書が大事! (1976白上; 1999河合塾; 文藝春秋2004; 2009広島大学)
- ・中央館 (開架4万冊, 書庫50万冊) →指定図書『高群逸枝全集; 全10巻』(理論社, 1966) ×10セットの衝撃, LL演習室, 学生は入庫禁止, 小説は新潮文庫のみ。
- ・学術研究室(学部図書室からの貸出1万冊) →『古今図書集成』『二十四史』『バルトリド全集』『ハミルトン・ギブ叢書』『イスラム百科』『スタインガスのペルシャ語英語辞典』など。
【引用④】
- ・まともに授業 【引用⑤】を受けた記憶無し→文庫本中心のささやかな個人蔵書と喫茶店読書生活。

▽札幌短期大学図書館時代 (1972～1975)

- ・新聞の求人欄で応募, 図書館のことをまったく知らない新人
- ・優れた先輩 (大館光男・長谷部宗吉・松田潤の各氏) に巡りあい, 司書を一生の仕事に。
- ・「図書館の相互協力」の原点→石井・前川『図書館の発見』【引用⑥】で覚醒!
- ・1973年度日本図書館研究会のセミナー (箕面山荘, 4日間) に参加
- ・スタートが小規模図書館であったことの幸運。

▽北海道大学図書館時代 (1975～1987)

- ・受入掛, 整理掛, 参考調査掛を各4年ずつ経験→70年代の大学図書館を体感!

3 大学図書館の連携組織(1)

連携組織は課題があるときに活性化する?!

・連携組織の前身は戦前から存在した。発展期を迎えるのは1970年代。

- **日本図書館協会 (JLA)・日本図書館協会大学図書館部会**
 - ・1892 日本文庫協会 (世界3番目) →1908 日本図書館協会に。1950年代の「図書館の自由に関する宣言」制定時期の緊張と結束。個人加入。
- **国立大学図書館協会 (JANUL)**
 - ・1954 全国国立大学図書館長会議→1968 国立大学図書館協議会→2004 現行
- **公立大学協会図書館協議会**
 - ・1955 公立大学図書館連絡会→1957 公立大学図書館協議会→1970 現行
- **私立大学図書館協会 (東・西地区部会)**
 - ・1930 東京私立大学図書館協議会→1938 現行 加盟校553校 (2020年度)
- **地区協議会 (都道府県単位、国立・公立・私立別、館種横断型)**
 - ・1970年以降に設立されたところが多い
- **国公立大学図書館協力委員会**
 - ・1982.11 設立 ①相互利用 ②資料交換 ③書誌情報ネットワーク ④研修、交流
- 日本図書館研究会、中部図書館情報学会、西日本図書館学会等

3 大学図書館の連携組織(2)

連携の発展形

- 大学コンソーシアム京都
 - ・1993から段階的に。図書館関係では「共通閲覧システム」
- 山手線沿線私立大学図書館コンソーシアム
 - ・2000.8設立、青学・学習院・國學院・東洋・法政・明治・明治学院・立教の8校
 - ・学生証、貸出 (別途手続き)、雑誌分担収集等の図書館相互協力
- JANUL (国立大学図書館コンソーシアム)
 - ・2002設立、国立大学図書館の電子ジャーナル共同購入コンソーシアム
- PULC (公私立大学図書館コンソーシアム)
 - ・2003.7設立、2006.5公立加盟、JUSTICE参加時366校参加
- JUSTICE (大学図書館コンソーシアム連合)
 - ・2011.4設立、JANULとPULCの統合、参加館551校 (最新)
- DRF (デジタルリポジトリ連合)
 - ・2006.4北大代表、公開ML・ワークショップ・海外情報提供等。2017AIRwayに移行。
- JPCOAR (オープンアクセスリポジトリ推進協議会)
 - ・2016.7国公立大学図書館協力委員会、国立情報学研究所

3 大学図書館の連携組織(3)

大学図書館の連携は強まっているのだろうか?

▽連携組織の意義

- ・情報交換、新情報の入手 (各図書館の活動の指針提供にも)
- ・重要課題 (個別館では解決できないような) の協議
- ・ロビー活動 図書館全体の予算確保のための活動の拠点
- ・図書館職員の研修
- ・図書館職員の交流
- ・図書館活動の記録保存機能

▽連携組織の変容

- ・1970年代~80年代の高揚期
- ・2000年以降の停滞傾向
 - 国立大学の法人化移行
 - 図書館職員の減少
 - 図書館予算の減少, 学内における地盤沈下
 - 外部委託の進行

▽IAALの存在意義? 図書館の連携を支援する力になりたい!

4 目録面での連携(1)

学術雑誌総合目録 (学総目)

- ▽ **もっとも古い連携ツール**→1923年『外国学術雑誌目録：大正10年来現存』未見
- ▽『**学術雑誌総合目録**』→戦後文部省で編纂、1953年に最初の版刊行。
- ▽ **1970年代~80年代図書館員必須のツール**→自然科学和文編1968年版/人文科学和文編1973年版/自然科学欧文編1979年版 (以後コンピュータ作成、青)/人文科学欧文編1980年版 (赤)/1982年補遺版 (緑)
- ▽ **和文編1985年版** (3分冊青, 丸善) →東京大学図書館情報学研究センター編集。北大図書館報『榆蔭』の採否をめぐる、編集主幹 (N先生) とのやり取り【引用⑦】
- ▽ **欧文編1988年版** (5分冊, 赤, 紀伊國屋書店) →学術情報センター編集。青赤緑の3編統合。1987~89年3年間編集作業に従事。
- ▽ **1988年1月 オンライン (NACSIS-CAT) での運用開始**
- ▽ **1997年 Webcatで提供開始**
- ▽ **冊子体刊行中止**→和文編2000年版 (2001年刊, 丸善) が最後の冊子体
- ▽ **2013年4月 CiNii Booksへ移行**

4 目録面での連携(2)

図書の「総合目録」

▽1970年代の所蔵調査→①個別館の蔵書目録②葉書・手紙③電話④研究仲間の情報⑤推測(著者の所属先等)⑥訪問調査

▽総合目録は存在したが・・・*主要研究論文【引用⑧】

①『学術図書総合目録; I-VIII』文部省大学学術局編(日本学術振興会, 1955-61)

動物学・数学・化学・物理学・教育学・図書館学・地学・人文地理学各欧文篇 1947年調査時点の50~110大学の蔵書44,800冊

②『新収洋書総合目録; 第1-4巻, 1959-1987年版』国立国会図書館編(1958-1990) 国会図・公立図2館・主要大学の洋書カード目録を収集して編集。10万点~17万点収録。

▽冊子体総合目録の問題点

- ・タイムラグ→受入から目録搭載までの期間
- ・収録対象期間が限定的
- ・刊年の古い図書は全ての版を検索する必要がある
- ・著者標目からしか検索できない

▽『全米総合目録』(The National Union Catalog)への憧憬

・形成過程については【引用⑧】中の文献(土井・松枝1974)が詳しい。

4 目録面での連携(3)

NACSIS-CATの「総合目録データベース」【引用⑨】

▽「学術情報システム」構想→1978年11月学術審議会諮問, 1980年1月答申

①一次資料の収集②情報検索③目録所在情報システム④データベース形成

▽構想の具体化→「学術情報センターシステム開発調査研究協力者会議」(1980.5)

▽中枢機関の設置→文献情報センター(1983.4)から学術情報センター(1986.4)

▽システム開発→1983秋~1984年夏の10ヶ月で!宮澤彰・安達淳・橋爪宏達・大山敬三・永田治樹・石井啓豊の各氏とメーカーSEの方々

▽NACSIS-CATの運用→1985暮から。初期の郷端清人氏らの奮闘(小西2012)

▽NACSIS-CATとは何であったか?→①当時の学術界ごぞとの取組みであったこと②全員の目標が「総合目録を作る!」にあった③開発者側も参加館の図書館員も皆、「共同分担目録事業」に燃えていた④目録作成の仕組みと総合目録の二兎を追った。

▽日本の「総合目録」の実現→①1990年代に入って「新収洋書総合目録」を凌駕②1997年のWebcat公開(国民のもの)③1300を超える図書館の蔵書データベース

▽NACSIS-CATを作ったのは誰か→もちろん「全国の図書館員」であることは間違いないが・・・当時の情報図書館課長の遠山敦子氏, 係長の雨森弘行氏, 調査官の松村多美子氏, 学術情報センター初代所長猪瀬博先生らがおられなかったら出来ていない!

▽新システムへの期待→「何のために」「誰のために」を再確認してほしい

5 相互協力(1)

文献複写

▽コピー機は70年代→60年代~70年代当初は「ジアソ式複写機」(青焼)が主流、70年代中頃から「PPC複写機」が登場し、文献複写全盛の時代に。MF、フィッシュは少数。

▽文献複写料金精算システム(国立大学間)→1979年、料金業務の簡素化、大阪大に料金計算センターを置く(雨森2003)

▽海外との文献複写(1980年代の経験)→1982年~1986年の4年間、海外文献複写担当、年600件処理(数十機関に)「草の根分けても」の実践。

▽BLDSC(旧名BLLD)→1973年の英国図書館(BL)再編で出来た貸出部門。クーポン方式、「所蔵調査なしで申し込んで欲しい」の衝撃。(神原1981)

▽NACSIS-ILLシステム→1989年ILLシステム開発の担当に。1992年4月運用開始。最大時年間120万件(ILLシステムによる受付件数)。(小西1992)

▽ILL文献複写等料金相殺システム(国公私大学間)→2004年から

▽文献入手の変容→2000年代に入ると文献複写から電子ジャーナル・電子図書・館(ELS)・機関リポジトリ等へ急速に変化。「オープン・アクセス」の世界の広がりで相対的に低下。

- ・文献複写(依頼) 2002年115万件, 2009年94万件, 2019年43万件
- ・文献複写(受付) 2002年149万件, 2009年113万件, 2019年50万件

5 相互協力(2)

現物貸借

▽郵送貸出→70年代はまだごく一部の大学。「相互協力協定」を結んだ大学同士に限定されていた? 80年代には増えた。名大、北大(年貸出500冊~1000冊)は積極推進派。国会図書館からは連日のように借用した。2019年度の統計では80%が実施。

▽来館受渡し→同じ地域の大学図書館には「相互協力協定」があり、直接来館受渡。

▽自動車搬送→都道府県立図書館のサービス。週1回などの頻度で巡回。

▽問題点

- ・前提となる「総合目録」が未熟だったので、所在確認が大変だった。
- ・郵送料の問題。北大は返送は図書館負担で片道利用者負担。切手の管理が悩みの種。
- ・「自動車搬送」は有り難いサービスだったが、先方の事業であるため、回数が減ったり、廃止になることも(東京都の事例!怒り)
- ・借用した本の本人への貸出问题(館内利用を原則にしている)

▽減少傾向

- ・現物貸借(貸出) 2002年116千冊, 2009年154千冊, 2019年103千冊
- ・現物貸借(借受) 2002年100千冊, 2009年137千冊, 2019年93千冊

6 他館利用

▽紹介状方式

- ・教員研究者でも利用大学に属する教員の紹介状もしくは所属大学の館長の紹介状が必要
- ・学生はほとんど許可されず

▽共通閲覧証制度

- ・1982年 国立大学教官に共通閲覧証を発行。閲覧と文献複写が認められる。のちに所属大学の身分証で代用可能になる。(大規模大学の強硬な反対)
- ・2006年6月 国立大学図書館間相互利用実施要項

▽館外貸出

- ・相互貸借制度を利用
- ・利用証(身分証)がある場合でも、別途貸出カードを発行

▽管理先行で利用が制限される

- ・却って不便になっているのでは？
- ・デジタル化の進行でますます現物を見ることができなくなっている。

大学図書館の公開

▽文部省の促進政策

- ・1980年代中頃から公開論議高まる(国立大学図書館協議会1986)
- ・国立大学の一般公開は進んでいる→税金で賄われているから。(雨森2002)

7 連携にたえる図書館とは？

利用者の不満を知る

- ・利用したい資料が閲覧させてもらえないこと→森銃三【引用⑩】など
- ・コレクションが貧弱
- ・落ち着かない閲覧室→漱石の不満【引用⑪】
- ・やたらと規則が多い、融通がきかない→川本三郎氏の怒り【引用⑫】

良質なコレクションの構築

- ・「図書館」という思想(中田1980)→本を孤立させてはいけない!
- ・必ず求めている人がいる→「太宰治の辞書」【引用⑬】
- ・北海道大学北方資料室(秋月1992)→「北方」を学ぶ人の聖地

魅力的な書架配置

- ・可能な限り「開架」にしてブラウジング可能とすること!→本が利用者を包み込むような配置
- 理想の図書館建築:開架の意義【引用⑭】
- ・使いたい本が近くに揃っている。→理想の閲覧室【引用⑮】
- ・やむを得ず書庫にした場合、特別な許可で書庫に入ることができる

利用者の要求を最大限かなえる

- ・そのために図書館があるのだから

利用者に「居場所」を提供する図書館

- ・利用者に「ここが一番落ちつく」と言わせたい!→還って来られる場所【引用⑯】

8 理想の図書館を創造する図書館員

▽図書館の本質を見失わない人に

- ・「ハンセン病図書館」を作った人から学ぶ→山下道輔氏のホスピタリティ【引用⑰】【引用⑱】
- ・ランガナン『図書館学の五法則』(1931刊)→第一法則「本は利用するためのものである」
第二法則「本はすべての人のためにある」、第三法則「すべての本をその読者に」の完全実現
(ランガナン1981;竹内2010)
- ・図書館を守ることが正しい生き方である→竹内愨先生【引用⑲】

▽常に利用者の要求を知る人に

- ・「省力化」「経済性」>「利用者の利便性」になっていないだろうか?

▽予算要求の達人に

- ・予算がなくても「出来ることは何でもやる」(旭山動物園2005)から、必要なら是が非でも予算を獲得する方向へ舵をきる。ここに図書館の叡智と連携力を結集する。
- ・予算がないことを「やらないこと」の理由にしてはいいのだろうか?

▽法律・規則に縛られすぎない人に

- ・原理原則を貫いたために利用者を怒らせていないか→井上ひさしの「図書館嫌い」【引用⑳】
- ・「法は人のためにある。人のためなら曲げてよい」(樹林ゆう子1997)

▽図書館学情報学の基本を身に身につけた人に

- ・図書館のプロ(プロの信念を持った人)になるための勉強をしよう!

9 おわりに

▽伝えたいたったひとつのことは

「利用者が喜ぶ姿をみるために！」

▽漏れた項目

- ・書誌調整の分野での図書館連携
- ・連携の新しい分野を考えること(「レファレンス協同データベース」の成功などを参考に)

▽IAALの活動に参加しませんか？

- ・次代の図書館を担う若い(還暦前)皆様、これから第二の人生とっておられる図書館経験豊かな中年の皆様、是非一緒に大学図書館を盛り立てていきましょう。
- ・準会員は会費不要です。

▽ご静聴ありがとうございました。

きっとこの頁には到達できていないと思います。

参考文献(1)

- ・[秋月俊幸1992]「<特別寄稿>北大北方資料室の今昔」『北大時報』,455,1992.2
- ・[旭山動物園2005]『(DVD)旭山動物園ペンギン跳ぶ：閉園からの復活プロジェクトX 挑戦者たち』(NHKエンタープライズ, 2006.3)
- ・[雨森1992]雨森弘行「すべての図書館をすべての利用者に：目標達成のための方略を求めて(講演)」『中部図書館学会誌』,(44),1-15,2003.2
- ・[雨森2002]雨森弘行「図書館の「仲よし」の源を究める」『名古屋大学附属図書館研究年報』,(1),2002
- ・[河合塾1999]河合塾編『学問の鉄人が贈る14歳と17歳のBOOKガイド』(メディアファクトリー, 1999.1) * 466名の研究者による「それぞれの専門領域の魅力を伝える一冊」
- ・[樹林1996]樹林ゆう子『すぐやる課をつくらぬ男：マツモトキヨシ伝』(小学館, 1996.7)
- ・[国立大学図書館協議会1986]国立大学図書館協議会『国立大学図書館における公開サービスに関する当面の方策：大学図書館の公開に関する調査研究班報告』(同協議会, 1986.9)
- ・[小西・甲斐1992]小西和信, 甲斐重武「大学図書館サービス活動の活性化に向けて：学術情報センター-ILLシステムの概要」『情報管理』,35(3),192-204,1992.6
- ・[小西2012]小西和信「NACSIS-CATの歴史に学ぶこと：新たな大学連携を求めて(講演報告)」『大学図書館問題研究会誌』(35), 19-37, 2012.8
- ・[小西2019]小西和信「文献から見た大学図書館経営論」『The Basis：武蔵野大学教育リサーチセンター 紀要』,(9),p.17-51,2019.3
- ・[小西2020]小西和信「大学図書館50年を振り返る」『SALA会報：埼玉県大学・短期大学図書館協議会』,(28),p.3-5,2020.3.31

参考文献(2)

- ・[榎原1981]榎原正義「BLLDの海外向けサービスの現況」『医学図書館』,28(4),1981
- ・[白上1976]白上謙一『現代の青春における挑発的読書論』(昭和出版, 1976.9/現代教養文庫『ほんの話：青春に贈る挑発的読書論』1976年刊の改題、文庫化, 1980.4)
- ・[竹内2010]竹内慈解説『図書館の歩む道：ランガナタン博士の五法則に学ぶ』(JLA, 2010.4)
- ・[中田1980]中田邦造著；梶井茂雄編『中田邦造：個人別図書館論集』(JLA, 1981)
- ・[広島大学]広島大学101冊の本委員会編『大学新入生に薦める101冊の本；新版』(岩波書店, 2009.3) * 広島大学総合科学部の教官が新入生のために選んだ本のリスト。2005年初版。
- ・[文藝春秋2004]文藝春秋編『東大教師が新入生にすすめる本；1-2』(文春新書, 2004-2009) * 「本書は、東大 教師による新入生のためのブックガイドとして、毎年四月、雑誌『UP』(東京大学出版会)に掲載されていたアンケートを再構成したもの。
- ・[ランガナタン1981]ランガナタン著；森耕一監訳『図書館学の五法則』(JLA, 1981)

引用文献① 鶴見俊輔

鶴見俊輔述；聞き手・山中英之『読んだ本はどこへいったか』(潮出版社, 2002.9)

▽「これまで読んできた本が、老人になった今、自分の中にどのように残っているか探してみたいんだ。過去の追想ではなく、現在の問題として、例えば、昔はおれもマルクスをよく読んだものだよ、とよくみんないうでしょ。だけどその本は今、どこに行っただと自分に問い返してみたいんです」

▽もうろくの中に残るもの 柳田國男→動詞から始めて、その動詞が使われる状況を伝える。片岡義男「よろしくお願ひします」は翻訳不能。石原吉郎『肉親にあてた手紙』。生島遼一の松江高校時代の恩師、深瀬基寛「朝、何事もなく新聞を読むのが楽しい」。「明治初期には、夏目漱石も、柳宗悦も、西田幾太郎も、ジェイムズを深く読んだ。…とにかく大学では難しいものがよくなってしまい、生活語から離れていく。その生活語から離れていないという意味で、高野長英も夏目漱石も面白いんです。しかし、明治期以来、学問の本道は生活語から離れ、それによって生活語は学問の隅に追いやられてしまう。そこに日本の学問の根本的な問題があると私は思っている」

[戻る](#)

引用文献② カードケースへの不満

山辺健太郎著「図書館巡り；(三)」『図書』147号(岩波書店, 1961.11, p.14-17) * 歴史家, 1905-1971

▽国会図書館の新館の書架について。「この室[目録室]にカード箱がならんでいるのだが、これについては少々申し分がある。その申し分というのは、カード箱が日本人の平均身長からみて高すぎることだ。きくところによると、このカード箱が高いのは、建物の天井の高さにあわせてのさずだが、もしそうだとしたら、こんな馬鹿げた話はないだろう。/高いといってもじっさいに見ないとわからないだろうが、一番上のカード箱からその二つばかりの箱は、ひきだしにいれたままではみえないくらいの高さだった」。

利用者の利便性ははじめから無視されていた？

[戻る](#)

引用文献③ 小松左京と高橋和巳

小松左京著『やぶれかぶれ青春期』（旺文社文庫，1986，p.186）

▽第三高等学校の「図書館にこもってとにかく手あたり次第に読んだ」

高橋和巳著「わたしの読書遍歴」<[所収]「書庫なき紙魚」『高橋和巳全集；第14巻』（河出書房新社，1978，p.275）

▽疎開先の四国の「友人の家の蔵書を片っぱしから読んでいった。それはまったくの無選択読みであって、その癖は後年まであらたらず、大学時代にも、図書館の開架室の書物をアイウエオ順に自棄くそに読んでいったことがある。翻訳の『アインシュタイン全集』といったものが、割合早い順位に並んでいたから、それも垂が桑の葉を齧ってゆくように読んでいった。だから、相対性理論についても、アインシュタインの通俗講演筆記を通してではあるが、文学者としては相当高度な理解があるつもりでいる」

[戻る](#)

引用文献④ 学科図書室の効用

外山滋比古著『乱読のセレンディピティ：思いがけないことを発見するための読書術』（扶桑社，2014.4）；『自分の頭で考える』（中央公論新社，2009.11）

▽「面接を受けたとなりの部屋が、**英文科の図書室**である。その足で、そこへ行って、「文学一般」（General）というセクションの本を全部、読んでやろう、そうすれば、文学というものがかかるに違いないときめたのである。はじめの方から順次借り出して読むことに、さっそくその日、二冊を借りて帰る。**英文科の図書室**は、助手の管理のもとにあった。当時より三代前に助手、山路太郎氏は、世界的批評家詩人ウィリアム・エンブソンが東京で教えた学生の中でエンブソンをもっともよく理解した人、俊才であった。」（『乱読のセレンディピティ』p.107-8）

▽「自分でわからなくてはいけないと思い、その足で**英文研究室の図書室**へ行きました。文学一般という分類の英語の原書が三十冊くらいありました。いまから考えると、ケンブリッジ学派といわれる学者、批評家の本が、当時としてはおどろくほどよく揃っていました」（『自分の頭で考える』p.177）。

[戻る](#)

引用文献⑤ 授業にはあまり・・・

礪川全次（1949-）著『独学で歴史家にある方法』（日本実業出版社，2018.1）

▽「私が学生だった当時は、いわゆる「大学紛争」の時代で、私が大学で授業らしい事業を受けたのは、通算しても二年間だったと記憶します。何とか単位をかき集めて卒業しましたが、今でも私には、「大学で学んだ」という実感がありません。」（「第1講 誰だって捨てられないものがある」）

江戸川乱歩著『アメリカ渡航の夢』<[所収]「探偵小説四十年」『江戸川乱歩全集；第20巻』（講談社，1979，p.21）

▽「大学在学中の内職を算えて見ると、活版小僧、写字生、政治雑誌の編集部員、市立図書館の貸出し係り、英語の家庭雑誌などが主なものであったが、**講義は余り聴かず、誰やらのように、早大図書館卒業という方がふさわしい**ような勉強の仕方であった。」（p.21）

[戻る](#)

引用文献⑥ 「草の根分けても」

石井敦，前川恒雄著『図書館の発見：市民の新しい権利』（日本放送出版協会，NHKブックス，1973.10//新版，2006.1）

▽「**本は何でも借りられる** 図書館は求められれば何でも利用者に貸出さなければならないのである。市民にとって一つの**図書館は全日本の図書館の窓口**なのであって、そこから「何でも」借りられるのである。図書館は**草の根分けても必要な本をさがし出し**利用者に提供する。」（「第二章現代の図書館 5リクエストサービス」p.53-54）

[戻る](#)

引用文献⑦ 学総目の編集方針例

永田治樹著「学術雑誌総合目録と文編データベースの編集」<[所収]『大学図書館研究』27号, 1985.12, p.15-34

▽編集方針はこうした目的を前提とし、i) 収録 範囲を以下のように示した。/①研究論文の発表を主目的とした逐次刊行物を第一義的な収録対象とする。②研究論文の発表を主目的とはしないが、実際に研究論文が掲載されている他の逐次刊行物を第二義的な収録対象とする。データ集、作品集、資料集等は、収録範囲に含めない。収録範囲は、具体的には予備版によって設定されることも付言されている。また、ii) 収録画数のめやすを40, 000タイトルとしている。収録範囲、誌数の設定と予備版の位置付けは、目標を段階的に実現していくための方策である。つまり、プロジェクトの実行可能性と照らし合わせて、最も緊急度の高い部分から手がけ、かつその範囲で欠落のないようにするものである。そして、収録誌を絞ったことによる混乱を防ぐために、予備版に「収録範囲の具体的な設定」という役割を与えた。(略)

引用文献⑧ 「総合目録」研究 (一部)

私製『「総合目録」関係文献目録(大正・昭和)』(243点)から

- [1951/08/Ba]馬場重徳「学術文献行政と学術文献総合目録」<[所収]佐藤隆司研究代表『戦後日本の学術図書館政策及び図書館学の展開過程：馬場重徳文書の組織化と分析』(図書館情報大学, 1999) * 文部行政を担う立場から総合目録の重要性を訴える。科研費報告書に収録。館雑誌』54(6), 1960.06, p.180-183. * 戦後日本で刊行された「総合目録」52点をリストアップし簡単なコメントを付す。
- [1960/06/Do]西沢秀正「戦後編さん刊行の総合目録について：紹介と批評」, 『図書館雑誌』54(6), 1960.06, p.180-183. * 戦後日本で刊行された「総合目録」52点をリストアップし簡単なコメントを付す。
- [1974/05/Do]土井稔子, 枝松栄「全米総合目録の成立と背景：National Union Catalog, pre-1956 imprintsを中心に」, 『参考書誌研究』(国立国会図書館), 通号9, 1974.05, p.1-29. * 世界最大の総合目録の計画と編集過程について。の「総合目録」に関する最も包括的な研究。
- [1978/03/Ma]丸山泰通「日本における「全国総合目録」沿革ノート」, 『図書館研究シリーズ』(国立国会図書館図書館研究所), no.19, 1978.08, p.1-100. * わが国の「総合目録」に関する最も包括的な研究。

引用文献⑨ NACSIS-CATの歴史関係文献

『NACSIS-CA/ILL関連文献目録(1975-2008)』
<https://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/biblio/>

- ・上記文献目録は、「学術情報システム」や「総合目録」「目録規則」「図書館の機械化」等の文献1,900点をリストアップしたもの。NACSIS-CATの歴史に関する文献も含まれている。
- ・その後の追加文献(NACSIS-CATに関するもののみ)
- ①国立情報学研究所学術情報基盤推進部学術コンテンツ課「共に創り、共に育てる知のインフラ：NACSIS-CATの軌跡と展望：NACSIS-CAT登録1億件突破記念講演会講演記録集」(国立情報学研究所, 2009.8, 78p) * 2009年2月6日に開催された記念講演会の記録。遠山淳子「学術情報システム構想の出発点」, 雨森弘行「学術情報システム：書誌ユーティリティの誕生と軌跡」などを収める。原点が分かる。
- ②小西和信「NACSIS-CATの歴史に学ぶこと：新たな大学連携を求めて(講演報告)」『大学図書館問題研究会誌』(35), 19-37, 2012.8 * 第42回大学図書館問題研究会全国大会での講演記録。システム運用側からの報告。
- ③熊淵智之「これからの学術情報システムとNACSIS-CAT/ILL」『カレントアウェアネス』, (326), 2015 * 開始から30年経過した同システムの改訂についての検討状況レビュー。
- ④蟹瀬智弘『やさしく詳しいNACSIS-CAT』(樹村房, 2017.8) * CAT入力法の解説。
- ⑤佐藤初美「NACSIS-CAT/ILLの再構築について：2020年までの動きとその後の展望」『大学図書館研究』, 111号, 2019.3

引用文献⑩ 森銑三博士

森銑三著「思ひ出すことも」<[所収]『森銑三著作集；続編第15巻：雑纂3』(中央公論社, 1995.2//初出：『著作集』第1-12, 別巻の月報に連載したものの改訂増補)

▽「しかしさやうにして集めた資料も、いざ使はうとなると、なほその書留の前後が見たくなったり、その写本の全体を見直す必要が生じたりして、またしても図書館へ足を運ばなくてはならなくなる。それも一つの図書館だけでは済まず、あちこちと出かけなくてはならなかつたりする。私の出かける図書館のすべてが、一箇所に集つてあてくれると、助かるのだがなどと、虫の良いことを思つて見たりなどもした。さうして私といふ人間は、図書館を利用することばかりをしてみたので、自分の乏しい蔵書などは、問題にもなかつた。少しばかりの蔵書があつたところで、図書館へ行かずに済むものではない。だから私の買ふ書物といへば、参考書ではなくて、実際の役には立たない無用の書ばかりであつた。しよつちゆう書物の世話になりながら、私は蔵書家でも何でもなかつた。私は書物の利用者であつた。」(「一 資料焼失」p.10) * この部分の引用は適切ではありません。氏が史料編纂所に意地悪されて必要な史料を見ることができなかつた部分があつたのですが、今回見つかりませんでした。

[戻る](#)

引用文献⑪ 夏目漱石

29

夏目漱石著「入社辞」<[所収]『漱石全集；第11巻：評論・雑纂・序文』（岩波書店，1966,p495//初出：『朝日新聞』明治40年5月3日）

▽「大學で一番心持ちの善かつたのは圖書館の閲覧室で新着の雑誌杯を見る時であつた。然し多忙で思ふ様に之を利用する事が出来なかつたのは残念至極である。しかも余が閲覧室へ這入ると隣室に居る館員が、無暗に大きな聲で話をする、笑ふ、ふざける。清興を妨げる事は莫大であつた。ある時余は坪井學長に書面を奉て、恐れながら御成敗を願つた。學長は取り合はれなかつた。余の講義のまずかつたのは半分は是が為めである。學生には御氣の毒だが、圖書館と學長がわるいのみだから、不平があるなら其方へ持つて行つて貰ひたい。余の學力が足らんのだと思はれては甚だ迷惑である」

[戻る](#)

引用文献⑫ 川本三郎

30

川本三郎著「東京つれづれ日誌」<[所収]『そして、人生はつづく』（平凡社，2013.1//初出：雑誌『東京人』連載）

▽「杉並図書館に対して怒っている。温厚な私が!?/杉並区の図書館では、本を返しに行つて、そこで新しい本を借りようとした場合、うっかり一冊、返し忘れた本がある場合（予約が入っていない本でも）、ただちに未返却者として、新しい本を借りられなくなる。/うっかりミスに対して厳しすぎる。/以前は図書館はどこもそうだと思つてあきらめていた。ところが一年前、親しくしている市川市の前の文化会館の館長のOさんにその話をしたところ、Oさんは「市川市ではそんな厳しい措置はとっておりません。うっかりミスは誰にでもあつた。何か月も返さないという悪質な場合はともかく、一冊、一日や二日、返し忘れたからといって貸出し禁止にするなどということはありません」という。/なんと寛大な。それで東京都内の他区の図書館を調べたところ、どこもうっかりミスに対しては寛大で、ペナルティを科すなどしていないことが分つた。二十三区内で杉並区と江東区だけが厳罰主義。/そこでなぜ杉並区はこんなに厳しいのか、山田宏区長に手紙を出した。/和田義広という中央図書館館長から返事が来た。実におざなりなもので現行ルールをただ説明しているだけ。その根拠を示さない。/警察だって自転車の無灯火運転や赤信号の横断でいきなり処罰はしない。まず注意する。（略）」（『東京人』2010年7月号）

[戻る](#)

引用文献⑬ 太宰治の辞書

31

北村薫著『太宰治の辞書』（新潮社，2015.03，p.179-214）

どこにでもあつたはずの本はどこにもない！

▽「正宗の名刀は残つても台所の包丁は残らない。そういう「当たり前」の辞書で、「ロココ」という言葉は、どう扱われていたのか。/こういつたことを調べるなら、まず国会図書館だ。/・・・」

▽『掌中新辞典』（藤谷崇文館，1924）を探す話。

▽「群馬県立図書館までは、一キロもないほどの分りやすい道だ。/お昼はとうに過ぎていて、焼きまんじゅうを入れたおかげで、空いて困るというほどではない。それよりも、/——『掌中新辞典』を、早く手にしたい。/という気持ちの方が強かつた。/広い通りを進んで、二つ目の交差点を右に折れる。すぐに県立図書館が見えた。・・・/目指すのは書庫の、しかも禁帯出の本だ。借り出されている筈がない。とはいえ、万一むだ足になるのはつらいから、前以て、今日は何を見せてもらいに行くか、連絡を入れておいた。」

▽「座つた席には、前の大きな窓から柔らかな光が入つて明るい。/『掌中新辞典』の背には「住谷文庫9253」と書いたラベルが貼つてあつた。一括寄贈された蔵書の中の一冊なのだ。だから、残つた。図書館のものだったら、整理されていたろう。辞書の最後に持ち主の住所が、「東部第十四部隊気付」と書かれている。軍隊に持つて行つた辞書なのだ。まさに「掌中」ならではのことだ。」

▽「・・・/太宰が手にした当時の表紙を見られなかつたのは残念だが、日本のどこかの、書庫の奥に、完全な一冊が眠っているのかも知れない。・・・」 [戻る](#)

引用文献⑭ 開架の意義

32

堀部安嗣「初期プラン」<[所収]松原隆一郎、堀部安嗣著『書庫を建てる：一万冊の本を収める狭小住宅プロジェクト』（新潮社，2014.2，p.126）

開架にすることの意義

「松原さんの最初の要望は集密の開架書庫でとにかく収蔵量を増やす、ということでしたが、私の中では初めから開架書庫はあり得ませんでした。今まで感動した図書館のイメージがずっとつきまどっていたからです。ストックホルムの市立図書館、パリの国立図書館、ロンドンの大英博物館の図書館、ボストン郊外のエクセター図書館、（書店ですが）ポルトのレロ・イ・イルマオン書店などスケールは今回の計画とまったく異なりますが任巻の開架の本棚を見ていると、人間の英知と研鑽の素晴らしさ、美しさを体全体で感じることができます。また開架にして、すべての本の背表紙が一覧できることで、直観的にどこに何があるかがわかり、こちらの本棚と、あちらの本棚にある本と本が勝手に関係しあつたり、共鳴したり、反応を起こしたりするのです。」（p.126）

[戻る](#)

引用文献⑮ 理想の閲覧室

田山泰三（1960-）著「ライプニッツの図書館活動」<[所収]酒井潔[ほか]編『ライプニッツ読本』（法政大学出版局，2012.10）

- ゴットフリート・ライプニッツ（1646-1716，哲学者・数学者）ゲッチンゲンのウィンザーに影響
 ▽図書館とは「あらゆる時代、あらゆる民族の最も偉大な人物たちがその優れた思想を語り伝える場」であり、「人間のための百科事典」「すべての科学の宝庫」である。」
 ▽「図書館経営の原則を「多くの図書を集めることよりも質のよい図書とは珍奇な本ではなく、学芸の発展に貢献した人たちの著作である。」
 ▽「「図書および図書目録作成に熟知した専門職員」すなわち「図書館司書」を置く体制をつくること」
 ▽図書館利用者に対するサービス⇒「必要な資料が利用者を円形に取り囲んでいるような設備を理想」とする。「ヴォルフエンビュッテル図書館の建物」に反映した。
 ▽「全科学の販売店」「全知の教師」
 「人類の魂の宝庫」
 「すべての時代の偉大な人たちとの話し合いの場」
 「一つの建物のなかに国民が奇跡的に集まり、読者に対して自分の選んだ思想を語って暮れる場所」になるべきだ。

[戻る](#)

引用文献⑯ 内田樹氏

内田樹著『街場の憂国論』（晶文社，2013.10//文春文庫，2018.06）

- ▽「卒業生が、転職しようかどうか迷って、図書館に来た。「学生時代に一番好きで、よく考えごとをしていた場所」だったから。「そこにゆけば、ありありと思い出せる場所」「そこに来れば、もとの自分に戻れる気がする場所」——休日のキャンパスを訪れた。学校に「そういうたらしき」がある。」

[戻る](#)

引用文献⑰ ハンセン病図書館 1

山下道輔著；柴田隆行編『ハンセン病図書館：歴史遺産を後世に』（評論社，2011.10）

- ▽「図書館を支えるうえで最も大事なことは、**利用者の役に立ち、喜んでもらいたいという、その「心」**ではないでしょうか。それが四十年間ハンセン病図書館をやってきた私の実感です」（「ハンセン病図書館と共に」p.48）。
 ▽「人の役に立てるといえるのは本当に嬉しいことだと思うが、図書館を支える最も大事な要素は**利用者**に**役に立ち喜んでもらいたいという「心」**だと思う」（「図書館の利用者」p.65）。
 ▽「利用者が来たとき、最初の一日二日はどこにどんな本があるとか、その所在など案内するが、その後は自分で直接見て、読んでもらっていた。利用者が何らかの形で論文なり著者として成果が出たら、それを図書館に提供していただいた。利用者に情報提供し、成果物を納めてもらうという約束だからこちらも一生懸命サービスする。私は司書の資格なんてもっていないし、図書館のことを学問的にどこかで習ったわけでもないが、自然にこういったやり方が思いついて定着した。利用者と一緒に融和し、仲良くなるのがコツ。何でも答えられるようにするのが図書館員の使命だと思っているから、ハンセン病のほんのひとかけらほどの微細な関係記事でも掲載されていけば集めようと努力した」（「図書館の利用者」p.65-66）

[戻る](#)

引用文献⑱ ハンセン病図書館 2

山下道輔著；柴田隆行編『ハンセン病図書館：歴史遺産を後世に』（評論社，2011.10）

- 「高松宮記念ハンセン病資料館」（現「国立ハンセン病資料館」）への移管
 ▽「あそこに落ち着いたということ、一段落して、よかったなという思いはあるけれど、収められたあの状態を維持管理するするに止まるのではなく、やはり書物を生き物として扱うこと、傷つけたり、破損したりしたら修復の手当てをして、多くの利用者に読み継がれる寿命の長い書籍づくりを心がけること、絶えず資料収集をしていることを基本に、図書資料室を育てていくことが大事だと思し、ハンセン病の資料に通じていて価値を知る人に携わってもらって、国内のハンセン病資料だけでなく、海外の資料も集めておこうという意欲をもった後継者が出てくるいいなと思うし、そういう受け継ぎが出来る人材を求めていかなければならないと思うんだよね。」
 ▽「資料館がスマートになったのはよいのですが、私たちの思いがぬけたような資料館になってしまいました。残念だなと思います。私たちとしては、患者同士が支え合って生きてきた、先輩たちのさまざまな苦勞などが展示を通して感じられるようにするとか、図書を貸し出して利用者が利用しやすいようにするとかしてほしい。資料を保存することも大切ですが、それを死蔵させてはいけません。……」（「ハンセン病図書館のおもいで」）

[戻る](#)

引用文献⑱ 竹内愨先生

竹内愨著『子どもが生きるための図書館』（小金井市の図書館を考える会、2007.6）

▽「人間は図書館を大事にするかぎり絶滅しないのです」

▽「過去の人間はどういうふうにものを考えたか、そしてそれから先どう生きて来たか、全く新しい環境のなかで、人間関係はどうなるのか、また自然環境とのかかわりはどうか、そういうことを考えるために、考える材料が必要」「そのために作りだした装置＝図書館」

* ここも適切な箇所を引用できていません

[戻る](#)

引用文献⑳ 図書館嫌い

井上ひさし著『本の運命』（文藝春秋、1997.04、p.105-129：第5章「三か月で嫌になった上智大学」の巻）

▽「もちろん大学には図書館がありました。釜石で感激してますから、ここも通いつめた。ところが、この上智大学図書館がひどかった。/夜八時まで開いているんですけど、借りた本はそれまでに必ず返さなければいけない。返さないとバツ印がついて、次から借りられなくなる。（略）館員に厳格な人がいて、一秒でも過ぎると返却を受け付けてくれないんです。（略）/この館員に怒ってる学生がたくさんいたんです。そこで、みんなで「よし、あいつに一度、泡を吹かせてやろう」と相談一決、大学図書館が一番大事にしている本を盗んではまおうということになった。/（略）その館員は五時から来るんですね。というのは彼もアルバイトなんですよ。図書館で働いて生計を立てながら、上智の大学院で勉強している。今、考えればじつに見上げた苦学青年ですが、僕らを怒らせたのが運の尽きだった（笑）。/（略）/後で彼はすごく叱られたという噂を聞いて、溜飲を下げましたが、後日談を言いますと、彼はのちに有名な評論家になりました（笑）。/図書館で大事なものは館員ですね。館員が、同じ本好きの立場で、「わかった、わかった。一秒遅れたけど、返したことにして上げよう」と言ってくれば、僕は図書館離れしなかったかもしれない」（『いじわるな司書に反撃す』）。

▽日垣隆著『つながる読書術』（講談社現代新書、2011.11、p.52-53）

▽渡部昇一著『知的生活の方法』（講談社、1976.04、p.97-99：「図書館に住む」）

[戻る](#)